

キリスト教と良心



同志社大学 神学部教授
良心学研究センター長
小原 克博

1

1

聖書における「良心」

3

Overview

1. 聖書における「良心」
2. 「良心」概念の系譜
3. 良心とコミュニティの境界線
4. 良心が開く地平 — 良心学の挑戦
5. 今回の課題

2

【復習】良心と真理

生のごときは日暮れて途遠く、なお克く
驚馬千里を駆くる能わずといえども、た
だただ我が良心を真理に照準して使用
し、天より賦与するところの力を竭くし
て一生を終わらんと欲するのみ。

(「徳富猪一郎宛」手紙、1882年、『新
島襄の手紙』167頁) ☞ 『新島襄365』

【8月7日】

4

偶像に供えられた肉

わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その**良心**が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。そうすると、あなたの知識によって、**弱い人が滅びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。**このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い**良心**を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。それだから、食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。（「コリントの信徒への手紙1」8:8-13）

5

律法と良心

- 「こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの**良心**もこれを証しており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。」（「ローマの信徒への手紙」2:15）
- 「こういう人々」（=異邦人）は、律法を仮に知らなくても、それが要求すること（正しい行い）を自然に実行していれば、ユダヤ人と何ら変わらないことをパウロは主張している。その根拠として「良心」を挙げている。**異なる価値規範をつなぎ**、特定の民族や宗教を超えた、**より普遍的な地平**へと目を向けさせる役割を「良心」が担っている。

7

ユダヤ人共同体と異邦人共同体

- 「彼らの弱い**良心を傷つける**のは、キリストに対して罪を犯すことなのです。」（1コリ8:12）
- ヘブライズム的伝統（パレスチナ）に生きてきた人々とヘレニズム的伝統（地中海）に生きてきた人々の間にある大きなギャップをどのように埋めることができるのかに、パウロは心を砕いている。従来の伝統を超えた新たに視点に立つことによって、隔てを越えるイエスの愛（**越境的な愛**）を「**共に知る**」者たちの「**良心の共同体**」をパウロは目指していると言うことができる。

6

大祭司イエスと良心

以上のものがこのように設けられると、祭司たちは礼拝を行うために、いつも第一の幕屋に入ります。しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入りますが、自分自身のためと民の過失のために献げる血を、必ず携えて行きます。このことによって聖霊は、第一の幕屋がなお存続しているかぎり、聖所への道はまだ開かれていないことを示しておられます。この幕屋とは、今という時の比喩です。すなわち、供え物といけにえが献げられても、礼拝をする者の**良心**を完全にすることができないのです。これらは、ただ食べ物や飲み物や種々の洗い清めに関するもので、**改革の時**まで課せられている肉の規定にすぎません。（「ヘブライ人への手紙」9:6-14）

8

けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。なぜなら、もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。

9

古い時代と新しい時代 (2)

- ただし、聖書で語られている「良心」は、日本語の「良心」、儒教的なニュアンスの「良心」とは異なることに注意（後述）。
- この聖書の箇所では、良心はそのままでは不完全であること、キリストの血によって清められなければならないものとされている。

11

古い時代と新しい時代 (1)

- 「この幕屋とは、今という時の比喩です。すなわち、供え物といけにえが献げられても、礼拝をする者の良心を完全にすることができないのです。」（ヘブ9:9）
- 「まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。」（ヘブ9:14）
- 古い時代から新しい時代への「改革」のしるしとして「良心」が語られている。

10

まとめ

【空間的な越境】

イエスの越境的な愛を「共に知る」者たちの
「良心の共同体」
対立する価値を調停する力としての「良心」

【時間的な越境】

古い時代から新しい時代への
「改革」のしるしとしての「良心」

12

2

「良心」概念の系譜

13

【参考】 聖書の人間観、新島の人間観

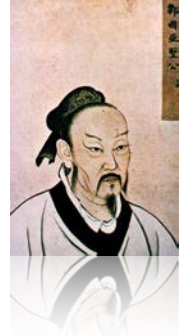
「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。**わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。**もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。（中略）わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」

（「ローマの信徒への手紙」7:18-24）

15

日本語における「良心」

- conscience の訳語として「良心」が最初に用いられたのは、ブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』（1863年）において、『孟子』から取られた。（『角川 新字源』）
- 孟子は性善説を唱えた。日本語の「良心」も、こうした儒教思想の影響を受けている。
- 福沢諭吉は『学問のすすめ』（1872-76年）の中でconscienceを「至誠の本心」と訳した。



14

西洋における「良心」

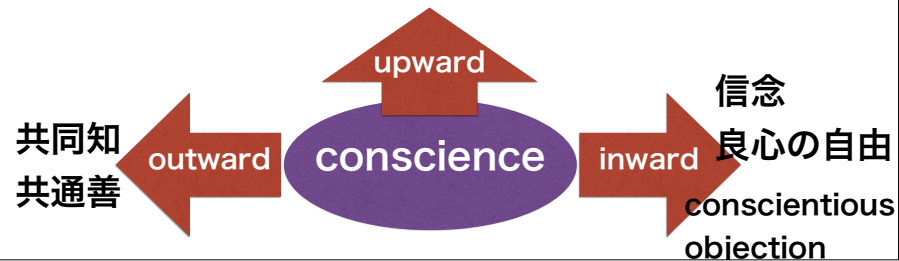
- conscience ← conscientia
（コンスキエンティア、ラテン語）
= con（共に）+ scire（知る）
- その元になるのは συνείδησις
（シュネイデーシス、ギリシア語）
= συν（共に）+ εἶδω（知る、考える）

【参考】 同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』（岩波書店、2018年）、『良心から科学を考える』（岩波書店、2021年）

16

誰と「共に知る」のか？

- ・自己の内面的な対話（内なる他者との対話）
【個人的良心】 → 自己認識（self-awareness）
- ・他者と「共に知る」 【社会的良心】
- ・神と「共に知る」 【信仰的良心】



17

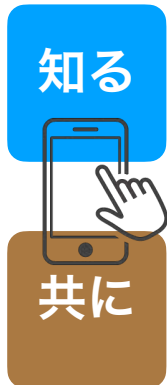
良心的拒否の多様化

- ・ Conscientious objection
- ・ もともとは、良心の自由や信教の自由を根拠とする「良心的兵役拒否」（conscientious objection to military service）を意味していた。
- ・ 教育、医療（中絶を含む）そして裁判員制度へと拡大

18

「共に」「知る」の変容と再構築

- ・ 現代では、情報を「検索する」とほぼ同義。
- ・ 「さて、アダムは妻エバを**知**った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。」（「創世記」4章1節）
- ・ 指先で得られる情報・知識の「共有」ではない。「個」（フィルターバブル）の外に出る。



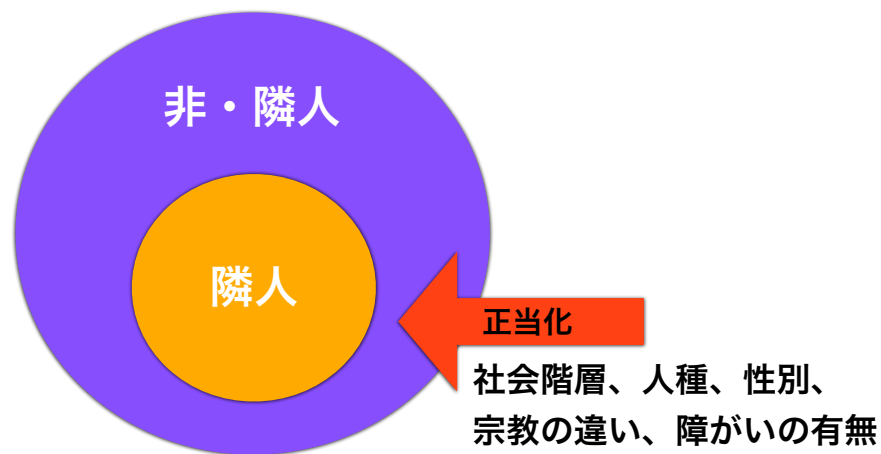
19

3

良心とコミュニティの境界線

20

共に知る「境界線」の設定と変遷



21

一人ひとりの良心が社会を変えるのか？

- ・一人ひとりが良心的に行動しても、全体としては変わらない構造的な問題がある。
- ・良心のパラドクス——「よかれ」と思ってやったことが、結果として大きな「悪」につながることもある。
- ・情動的良心 (emotional conscience) と認知的良心 (cognitive conscience)
 - ・情動的共感と認知的共感に対応。現代の情報技術は「共感」の過剰を引き起こすことがある。状況を冷静に俯瞰するための認知的良心が必要。

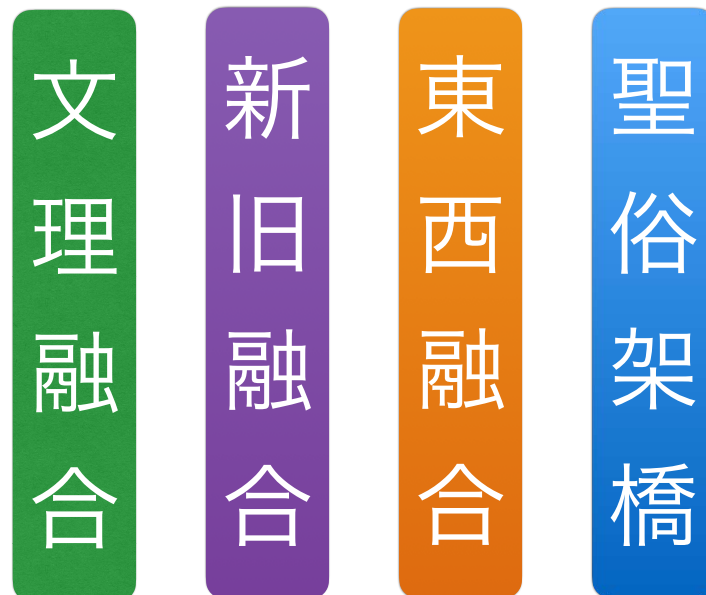
「対立する価値を調停する力」としての良心

22

4

良心が開く地平 — 良心学の挑戦 —

23



24

「境界線」と良心

「共に知る」範囲を狭く設定することによって、人間は快適さ（コンフォート・ゾーン）や専門性を増すことができる。しかし同時に、自らに都合よく「共に知る」範囲を限定することにより、近現代の社会が、社会的弱者や「非生産的」人間を排除してきた歴史的教訓から学び続ける必要がある。

包摂的な社会の担い手としての
「良心の共同体」の形成

25

文理融合と良心

- ・ 学問のたこつぼ化を克服するための共通のプラットフォームとしての「良心」
→ **アドバンスト・リベラルアーツ**（新島襄「自由教育」）
- ・ 「共に知る」に向かって、自分の学問的コミュニティの外に一步踏み出す。

27

良心概念の拡張



未来世代と「共に知る」、**大地**と「共に知る」
人工物（AI・ロボット）と「共に知る」

26

5 今回の課題（600～800字）

- ・ 今回の講義の中で、あなたの印象に残った（重要であると思った）点（複数可）を、その理由と共に述べてください。
- ・ 『新島襄365』【2月1日】～【2月28日】を読み、もっとも関心をひかれた日付を《二つ》あげ、それぞれ、その理由を述べてください。

28